



Title	＜紹介＞竹内史郎・下地理則編『日本語の格標示と分裂自動詞性』
Author(s)	黒星, 淑子
Citation	語文. 2020, 114, p. 63-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85454
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

竹内史郎・下地理則編『日本語の格標示と分裂自動詞性』

黒 星 淑 子

本書は、二〇一七年七月二日に行われた、成城大学大学院文学研究科・国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共催、成城学園創立一〇〇周年・大学院文学研究科創設五〇周年記念シンポジウムにおける研究の成果をまとめたものである。このシンポジウムは、消滅の危機にある言語や文化の保存を促し、そのことが「日本語」の新たな多様性の発見へと繋がっていくことの重要性を示したとの評価がなされている。完結した六つの章からなる論文となっている。各論ごとの構成は以下の通りである。

はじめに（竹内史郎・下地理則）

第一章 現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂

自動詞性（下地理則）

第二章 熊本市方言の格配列と自動詞分裂（坂井美日）

第三章 京都市方言における情報構造と文形態——格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性（竹内史郎・松丸真大）

第四章 沖縄県久高島方言の文法関係と情報構造の関係（新永悠人）

第五章 第一～四章へのコメント（佐々木冠）

第六章 語順と情報構造の類型論（風間伸二郎）

おわりに（木部暢子）

第一章の下地論文では、現代日本共通語の口語を対象とした分析を行い、脱主語化仮説を前提として格標示における分裂自動詞性を明らかにする。以降、第二章から第四章までは異なる方言を対象としながらも、いずれも格標示と分裂自動詞性に基づく論が展開される。そこに第五章として、第一章から第四章の各論に對しての分析、統括的視点に基づく論が述べられる。第六章の風間論文は執筆依頼によるものというところであるが、やはり根底には各論に関わるテーマが読み取れる論が示される。

本書は、異なる著者による論文からなるものではあるが、導入から展開への位置付けなど、構成に対する配慮も十分になされたものとなっている。また、ここには新たに分裂自動詞性という概念と共に脱主語化仮説の提示がある。これまで、方言は日本語方言学において様々な視点のもとに論じられてきた。それが今回の新たな提示により、方言を加えての日本語が対象となり分析される、一般言語学への組み込みが論じられたのである。この点からしても、本書が伝統的言語研究と一般言語学とを基盤とした上での新しい日本語文法研究の書と言えるであろう。

（くろしお出版、二〇一九年三月、一八三頁、三、二〇〇円）

（くろぼし・しょうこ 本学大学院博士後期課程）